



地理的大発見時代の英雄 ジェームズ・クック（1728-179）

未知の南方大陸を目指す

一四世紀末期に登場したポルトガルのアヴィス王朝の初代国王ジョアン一世の三男エンリケ（図1）は世界へ雄飛するための技術開発と人材育成を推進した航海王子として有名です。その支援により一五世紀中頃からポルトガルの船乗りはアフリカ大陸西岸を南下して一四八八年に南端に到達、さらに九八年には南端を周回してインドに到達することに成功します。以後、スペインやイギリスが追随し、西欧世界は発見の時代に突入しました。



図1 エンリケ航海王子  
(1394-1460)

一四九二年のC・コロンブスによる北米大陸近傍への到達、P・カブラルによる南米大陸への到達、さらに一五二二年に世界一周を達成したマゼラン艦隊の偉業により、次第に地球の全容が判明してきました。ところが一六世紀までの地理情報を総合すると、北半球の表面は陸地が四割で海洋が六割であるのに、南半球は二割と八割であり、当時の知識では均衡が維持できないため、南半球に未知の大陸があるという見解が登場したのです（図2）。

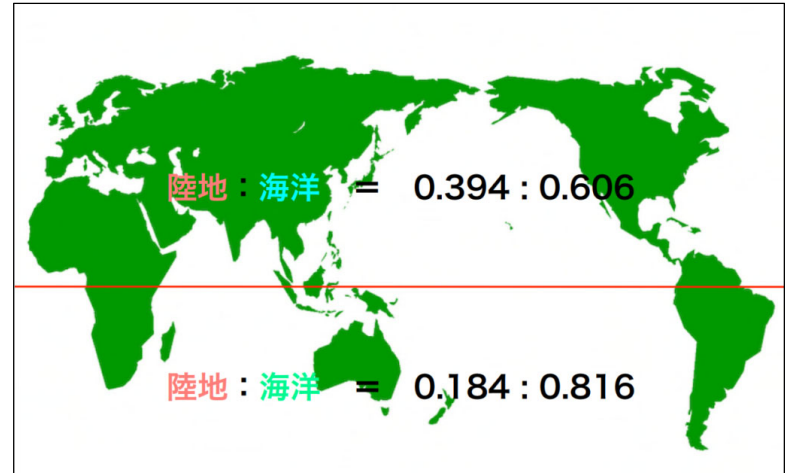


図2 南半球に不足する陸地

一七世紀以後、この未知の南方大陸（テラ・アウストラリス・インコグニタ）を見するため、当時の先進国家が競争で探検を開始しました。スペインのL・V・トレスは一六〇六年にニューギニアとオーストリアの中間の海峡を通過し、オランダのA・J・タスマンは一六四二年にニュージーランドの南島に到達しています。しかし、未知の南方大陸を目指して三度も太平洋を探検したのはイギリスのジェームズ・クックでした。

### 地図作成能力を発揮

クックは一七二八年にイングランド北部のノース・ヨークシャーに誕生しました。父親が農場に雇用されていたので、クックも数年は農場で仕事をしていましたが、一六歳になって付近の港町ワイトピアの商店の店員に転職しました。しかし商売には適性がなく、二年が経過してから石炭輸送を専門とする帆船の船主の会社に見習い船乗りとして雇用され、国内だけではなくアイルランドやノルウェーまで航海して経験を蓄積していきました。

船員としては適性があり、時間があるときに航海に必要な基礎学問を勉強し、将来への準備をしていました。三年の徒弟奉公の期限が終了してからは外国の帆船で仕事をし、有能であったため船長になることを要請されますが、二七歳になった一七五五年にイギリス海軍に上級水兵として志願入隊しました。ヨーロッパ各国が二手に分裂

して戦争する七年戦争の気配があり、それに参加して出世を目指したのではないかと推測されています。

翌年の七年戦争の開戦とともにクックはイギリスの軍艦ソールベイの航海長となり、カナダのセントローレンス河口の海図作成を担当し奇襲攻撃の成功に貢献します。さらに一七六三年から六七年までの五年をかけてカナダの大西洋側にあるニューファウンドランド海域を測量して正確な地図を作成してイギリス海軍本部とイギリス王立協会に評価されます(図3)。この功績により、国家の重要な仕事に派遣されることになりました。

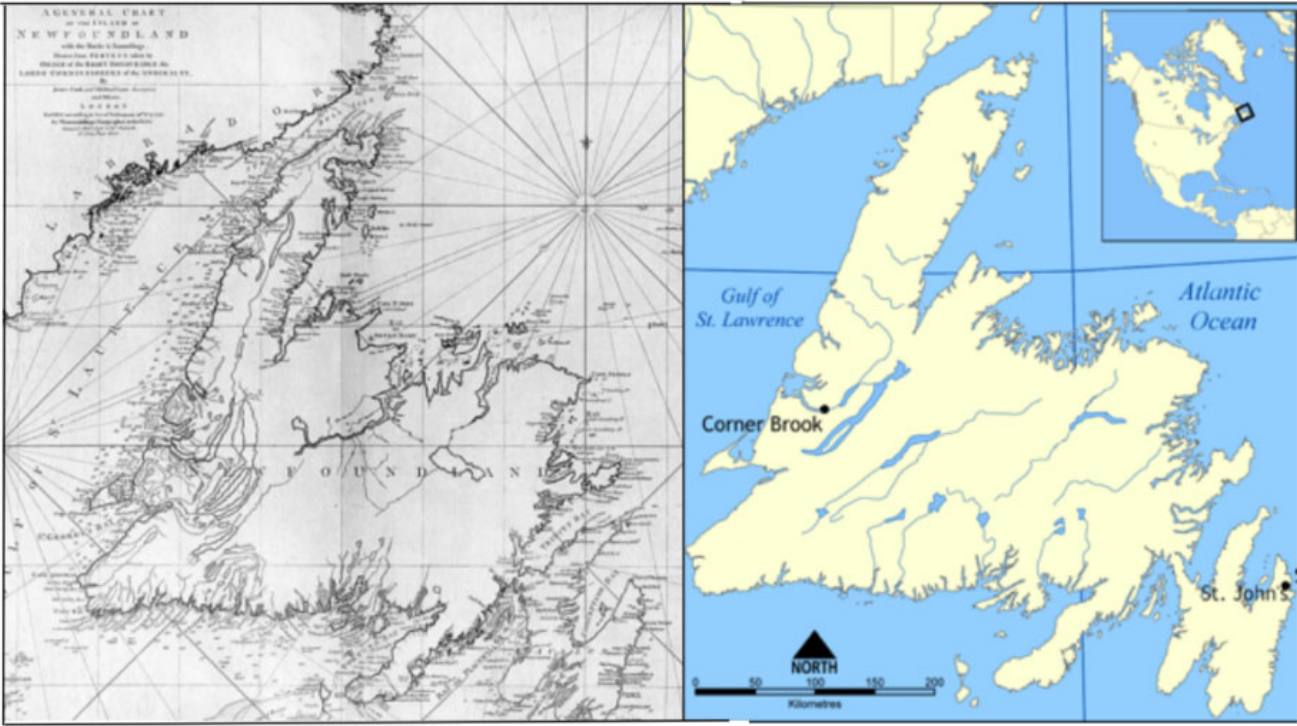


図3 クックの地図(左)と現在の地図(右)

## 第一回航海（一七六八―七二）

当時、南太平洋で大陸や島嶼を発見することは領土の拡大に直結するため各国が競争で目指していました。そこでイギリス王立協会は南太平洋で金星が太陽の前面を通過する現象の観測という名目でクックの指揮する帆船エンデヴァ（図4）を世界一周航海に派遣することにしますが、本当の目的は未知の南方大陸を他国に先駆けて発見して領土と資源を確保することでした。そのためクックを指揮権限のある海尉に昇格させ海軍士官にします。

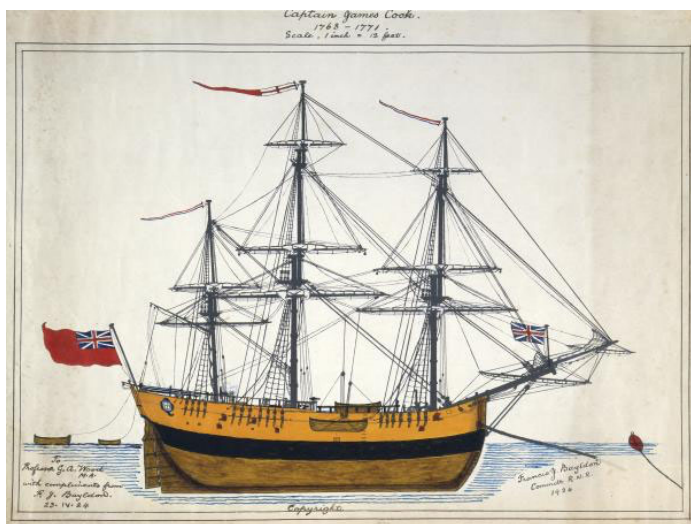


図4 帆船エンデヴァ

一七六八年八月二五日にイギリス南部の港湾プリマスを出航したエンデヴァは南米大陸南端のケープ・ホーンを周回して太平洋上を北上し、翌年四月一三日に前年、西洋の人間が発見していたタヒチに到着しました。金星が太陽前面を通過する六月三日まで周到な準備をして観測しましたが、期待したような成果はありませんでした。しかし、観測が終了したので秘密指令を開封すると、南太平洋で未知の南方大陸を発見せよという内容でした。

同乗したタヒチのトウバイアの助力により、一〇月六日にヨーロッパの人間としては二番（一番は一七七年前のA・J・タスマン）でニュージーランドに到達し、正確な地図を作成するとともに北島と南島の間のカック海峡を発見します。さらにオーストラリア南部にあるタスマニアを目指しますが、風雨の影響で、それより大幅に北側のオーストラリア大陸の東側の海岸に到着し、先住民以外の人間としてオーストラリアに最初に上陸しました。

クックはさらに岸沿いに北上しますが、グレートバリアリーフの浅瀬で座礁して船が破損してしまい、五〇日近くをかけて修理します。以後、すでに一六〇六年に見されていたオーストラリアとニューギニアを隔離しているトールレス海峡を通過してからオーストラリア東岸をイギリスの領土と宣言し、バタヴィア（現在のジャカルタ）に寄港して帆船の修理をして出港から約二年一〇ヶ月後にイギリスのダウンスに帰投しました（図5）。

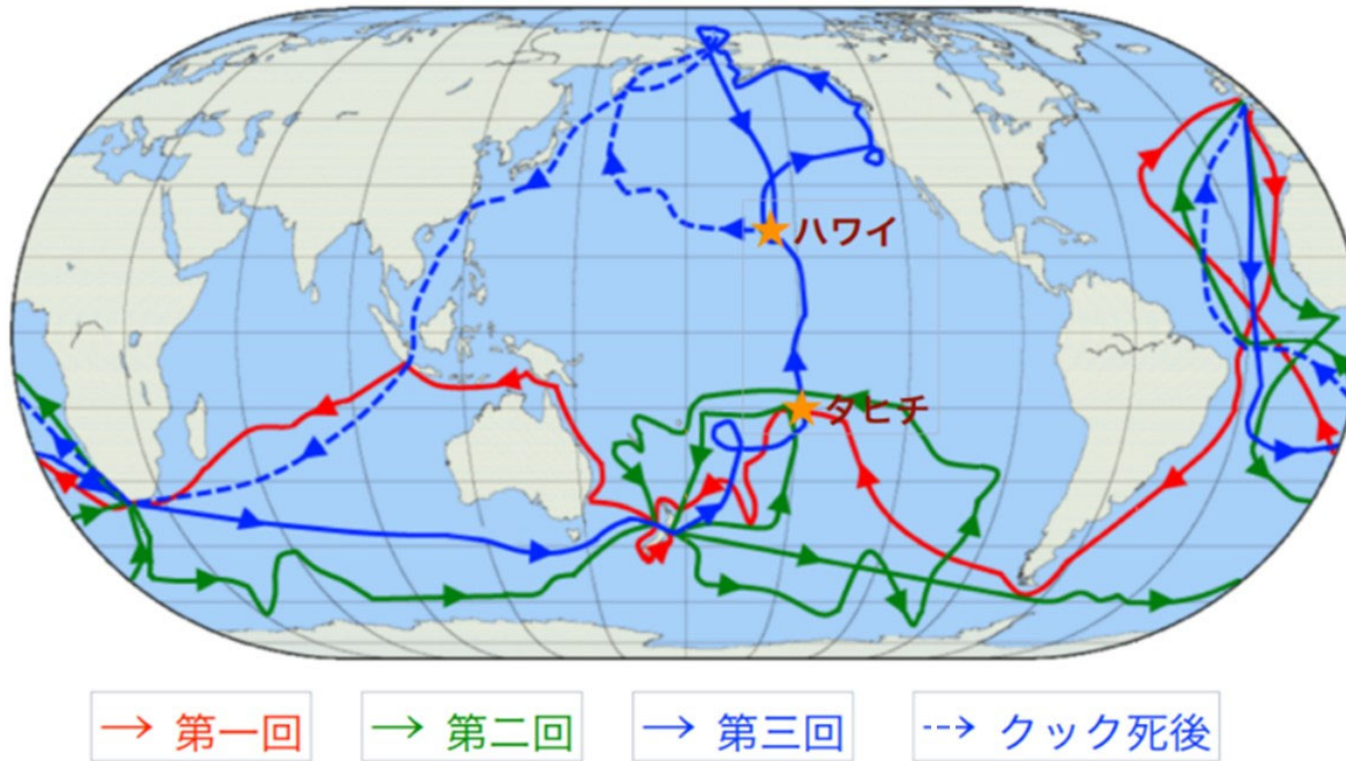


図5 クックの航路

## 第二回航海（一七七二―一七五）

最初の航海でニュージーランドとオーストラリアは期待されていた未知の南方大陸ではないことが明確になりましたが、イギリス王立協会はさらに南方に大陸が存在すると期待し、再度、クックを船長にした探検航海を企画します。海軍は二隻の新造帆船を購入し、一隻は海尉艦長に昇格したクックが指揮する帆船レゾリューション、もう一隻は海軍将校T・フルノーの指揮する帆船アドベンチャーの体制で一七七二年一月に出発しました（図6）。



図6 タヒチに停泊するレゾリューションとアドベンチャー

今回は東回り航路を選択し、アフリカ大陸南端から東進してオーストラリアの南側、ニュージーランドのクック海峡を通過して南太平洋を二回周回し、トンガ、イースター、バヌアツなどの島々に寄港しますが、結局、南方大陸は発見できませんでした。そこでアドベンチャーは帰還しますが、クックの指揮するレゾリューションはさらに南下し、南緯七一度一〇分まで到達し、南極大陸に約一二〇キロメートルまで接近していたこととなります。

クックは東進して南米大陸の南端を周回、南大西洋でサウス・ジョージア島とサウス・サンドウィッチ島を発見して一七七五年に帰還しますが、目的の南方大陸は発見できず、社会の期待は沈静しました。この帆船時代に経度が正確に測定できたのはイ

ギリス政府が正確な経度測定装置に多額の賞金の懸賞を実施した効果です。イギリスの時計職人J・ハリソンが一七三五年に考案したクロノメーターが賞金を獲得し、クックも携帯していきました。

### 運命の第三回航海（一七七六―八〇）

当時、ヨーロッパ諸国は北米大陸の北側を通過して大西洋側から太平洋側へ到達する北西航路に関心があり、一七四五年にイギリス政府は北西航路の発見に賞金を提供する法案を成立させました。この賞金獲得を目指し、イギリス海軍は探検を企画します。当初はC・クラークが指揮し、クックは本国で支援する構想でしたが、探検に意欲があるクックがレズリューションを指揮し、クラークが僚船ディスカバリーの船長となりました。

先行して一七七六年七月に出航したレズリューションはアフリカ大陸の南端を通過して東進し、ニュージールランドのクック海峡を通過して南太平洋から北太平洋を北上します。ハワイ諸島を通過してから東進して北米大陸の太平洋岸を探索して精密な地図を作成しながら北上します。しかし、一七二八年にロシア人探検家V・J・ベリングが発見したユーラシア大陸と北米大陸の境界にあるベering海峡は通行できませんでした。

そこでクックは南下して一七七九年二月にハワイ諸島に退却し、ハワイ島のケアラケクラ湾内に滞在します。約一ヶ月滞在してから出発しますが、しばらくして帆船が破損してしまいます。そこで修理のため出戻りますが、ここで事件が発生しました。クックの乗船する帆船に搭載してあったカッターボートの盗難事件が発生したので、そこで島民と返還交渉を開始しますが、精神的不安定な状態にあったクックは強硬な態度で交渉をしました。

そのとき村人が殺害されたという間違った情報が流布したため、クックを先頭とする上陸した人々を村人が攻撃しはじめました。小舟で避難しようとしたクックは背後から頭部を殴打され、浜辺に転倒したところを刺殺されてしまいました（図7）。遺体は現地の風習で解体され焼却されていましたが、隊員の交渉によって一部が返却され、正式に水葬されました。数多くの偉大な発見を達成した地理的大発見時代の英雄の最期でした。



図7 クックの最後（1779.2.14）

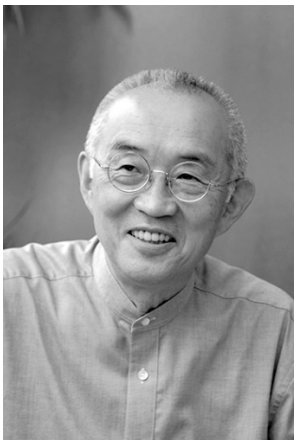
### 壊血病を解決したクック

クックが発見を目指した未知の南方大陸は約六〇年が経過した一八二〇年一月にロシア帝国海軍士官のF・G・フォン・ベリングスハウゼンとM・ラザレフが発見し、翌年二月にはアメリカのアザラシ猟師J・デイヴィスが上陸したとされています。クックは本来の目的は達成できなかったものの、先進諸国の視点からは未知の領域であった南太平洋を三度も探検し、数多くの地理的大発見を達成した一八世紀の偉大な船乗りでした。

さらなる貢献は一八世紀までの船乗りにとって脅威であった壊血病に効果のある食品を発明したことです。歯茎などからの出血が停止しなくなる壊血病は現在ではビタミンCの不足であることが判明していますが、一五世紀から一八世紀の船乗りには恐怖の病気で、この期間に約二〇〇万人の船乗りが死亡していたと推定されていますし、マゼランの世界一周航海では乗員の半分以上が壊血病で死亡したと推定されています。

しかし、クックは経験から、キャベツの酢漬けや塩漬け（ザワークラウト）に壊血病の予防効果があるという知識がありました。そこで長期航海の帆船に大量のザワークラウトを搭載し、船員の食料にしていたため、最初の世界一周航海では壊血病で死亡した船員がゼロという、当時としては奇跡のような結果でした。クックが未踏の海洋に大胆に挑戦し、業績を蓄積できたのは胆力だけではない、冷静な知識の蓄積があったからです。





つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叢智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。